

<研究資料>

日本厚生大会にみる厚生運動の実態

加藤 秀治¹ 澤村 博²

**Actual state of recreational movements in Japan viewed
from an analysis of the Japan Recreation Convention**

Shuji Kato¹ and Hiroshi Sawamura²

Abstract

The purpose of this study is to clarify the aim of recreational movements in Japan before the World War II through investigating activities of the Japan Recreation Association (Nippon Kosei Kyokai) especially the Recreation Conventions (Kosei Taikai) organized by it.

In 1938, the Japan Recreation Association was founded as an affiliated organization of the Ministry of Health and Welfare for the enlightenment of recreational movements. The Japan Recreation Association conducted various activities, and the Recreation Conventions were representative ones. It organized the 1st Japanese Recreation Convention, the 2nd Japanese Recreation Convention, the Pan-Asian (Koa) Recreation Convention and the East Asian (Toa) Recreation Convention.

The 1st and 2nd Japanese Recreation Conventions were organized tied up with the National Conventions for Spiritual Mobilization (Seishin Sakko Taikai) organized by the Great Japan Amateur Sports Association, and athletic meetings were held in every ward as a part of their events. Thus, it can be said that these conventions were conducted while seeking a model of the policy for organizing these conventions.

Later recreation conventions were organized as the Pan-Asian Recreation Convention and the East Asian Recreation Convention extending the target area to foreign countries, but these conventions were not really international, because participating nations were limited to Asian nations and allied nations.

From these considerations, it can be said that though these Recreation Conventions were conducted for the purpose of improvement in physique, their activities remained to be superficial and hardly contribute to achievement of the purpose.

1. はじめに

1938年（昭和13年）1月に厚生省が誕生し、そのわずか3ヶ月後に日本厚生協会が外郭団体として設立された。日本厚生協会の活動には様々なものがあるが、その中でも中心的な活動として日

本厚生大会がある。この大会は厚生運動の全国大会といえる大会であり、当時の厚生運動関係者や体育関係者を集めて開催された。

厚生省の外郭団体として設立されたことから日本厚生協会の活動は厚生省の意向が反映されてい

1 日本大学大学院文学研究科 Graduate School of Literature and Social Sciences, Nihon University

2 日本大学文理学部 College of Humanities and Science, Nihon University

ると考えられる。

本研究では厚生省の設立から戦時下の厚生大会である4つの大会を当時の史料や二次史料を基に分析し、特徴を明確にすることでこの時代の厚生運動がどのようなねらいのもとで行われたのかを明らかにすることを試みる。

2. 厚生省設立の経緯

本章は『厚生省 50 年史 - 記述編 -』を基に考察していく。¹⁾

厚生省設立について内務省や衛生局を中心に労働、福祉などの社会行政・衛生行政を一元化した行政組織を設けようという考えは古くからあったとされている。その後いくつかの案が提案されたが新省設立が具体性を帯びたのは、1936年(昭和11年)3月に発足された廣田内閣からである。

新省の設立が政治課題となった背景には徴兵検査などで国民体力の低下が明らかとなり、その改善策が強く求められたことにあった。特に問題となったのは結核患者の増加である。またこの時期に内務省の衛生局内でも政府の衛生行政に対する理解が不十分であるとして陸軍省と協力して強力な行政機構を作った方が良いとする考えも見られた。こうした不満が新省設立の素地を作ったと言える。

厚生省が設立された当時は対外的な侵略が拡大していく中で軍部(特に陸軍)が大きな政治的影響力を持っていた。²⁾ 軍部の動きは厚生省設立に関しても大きな影響力を發揮した。その最たる出来事が近衛首相への新省の創設の提案である。近衛内閣の成立に際して、陸軍は内閣支持の条件として国民体力の向上を図るための新省の創設を提議し、近衛首相はそれを受け入れたと伝えられる。

陸軍省は1937年(昭和12年)6月15日、「保健社会省」案を提案した。これは陸軍省の提出した衛生省案の組織機構を整理し、新たに生活合理局を設けるなどの相違が見られるが、衛生局・体力局を中心として労働局を欠くというものであった。

そして1937年(昭和12年)7月9日の閣議で「保健社会省(仮称)設置要項」が決定した。その後長期戦の様相が濃くなり、国民の体位向上を目的とする新省の創設の必要性は高まり、政府は

1937年(昭和12年)12月3日の閣議で保健社会省官制案を決定し、直ちに枢密院に諮詢・奏請の手続きをとった。

枢密院は審査委員会を設け、1937年(昭和12年)12月10日より審査を開始した。そこでは、省の名称が特に問題となった。省の名称については、当時の国内情勢から「社会」という文字を不適当とする意見、他省なみの2文字にすべきという意見、「保健」が保険と混同されるといった意見があり、書経・左伝にある「正徳利用厚生」から「厚生」という語をとって厚生省という名称に改められた。

こうした修正を行い、政府は1937年(昭和12年)12月24日に再び諮詢・奏請の手続きをとり、同日の枢密院本会議で厚生省の創設が可決された。翌1938年(昭和13年)の1月11日に出された勅令第7号「厚生省官制」及び勅令第9号をもって「保検院官制」が公布・施行され、厚生省が誕生した。

3. 日本厚生協会設立の経緯

戦前の厚生運動は日本厚生協会がその啓蒙活動に従事していた。日本厚生協会の設立には厚生省の設立と当時オリンピックと同時期に開催されていた世界厚生会議が関係している。

日本厚生協会設立の6年前の1932年(昭和7年)ロサンゼルスオリンピックの時に同地で第1回世界厚生会議が開催された。

その後1936年(昭和11年)ベルリンでオリンピックが開催され、同時期にハンブルグにて第2回世界厚生会議が開催された。この年に1940年(昭和15年)に東京でオリンピックの開催が決定した。そして併せて開催される世界厚生会議も大阪で行われることも決定した。そのためその大会の受け皿となる国内の機関が必要となり、日本厚生協会設立に弾みをつけた。日本厚生協会の設立には次のような趣旨があった。

今ヤ国運伸長ノ秋ニ際会シテ国民ノ体力、徳性ノ向上ヲ図ルノ要一層緊切ナルモノ之ガ為政府ハ夙ニ意ヲ用ヒ新タニ厚生省ノ設立ヲ見各種団体ニ於テモ亦努力施設スル所多シ

然レドモ其ノ目的ヲ貫徹シ所期ノ効果ヲ挙ゲム

トセバ広く国民ノ日常生活ヲ刷新シ特ニ余暇ノ利用ニ関シ進ンデ国民ヲ指導シ凡ソ不健全、不経済ナ娛樂ノ方法ヲ矯正シテ心身ヲ錬磨シ情操ヲ涵養シ多衆相俱ニ樂シミ我が国固有ノ文化ノ維持発展ヲ図リ以テ国民親和ノ実ヲ挙グル機会トナスベキナリ

茲ニ日本厚生協会ヲ設立シ健全ナル余暇ノ善用ヲ指導シ以テ国民ノ福祉ノ増進ニ貢献セントス、大方ノ賛同ヲ仰グ所以ナリ³⁾

この記述から日本厚生協会には国民の体力・徳性の向上という目的のために余暇の利用を進んで指導すること、その中で健全なる余暇の善用を指導することを活動内容として日本厚生協会は設立されたことが推察できる。

日本厚生協会の名称については、当時の風潮として外国から来た言葉は敵視されていて横文字が使えない状況にあったので、レクリエーションとは別の言葉が必要となった。そして関係者を集めて協議会を開き、約20種類の候補名を挙げ、討論が行われた。その時に挙げた言葉としては「慰安、慰楽、娯楽、厚生、厚生運動、厚生活動、余暇、余暇利用、潤生」などがあった。この中から、厚生省が発足した時であり、広く用いられ、わかりやすいということからレクリエーションを厚生とし、協会の名前も日本厚生協会に決定した。⁴⁾

日本厚生協会設立時の直接の所管局は厚生省体力局であった。その後1941年(昭和16年)には生活局、1943年(昭和18年)には健民局へと移っていった。そして社会局の所管と移り、その後終戦を迎えた。

体力局の所管下では大部分が体力増進を目指すものであったため、健歩や強歩の名前で歩け歩け運動が各地で開催された。生活局の所管下では国民生活に直接関わるような活動が啓蒙された。健民局では戦争の真ただ中にあるため軍歌の指導、戦意高揚のための様々な活動が啓蒙された。社会局の所管下では福祉事業と混同されつつ、なすことなく無為の内に終戦を迎えた。⁵⁾ ここには厚生省の外郭団体としての協会の立場上、厚生省の思惑に左右されていたことが分かる。

4. 日本厚生協会の活動

(1) 第一回日本厚生大会の趣旨

第一回日本厚生大会は1938年(昭和13年)11月1日から3日までの3日間の日程で代々木外苑の日本青年館や陸上競技場を中心として開催された。この大会はこの年に決まった東京オリンピックの開催の中止を受けて開催され、次のような趣旨で開催された。

凡ソ厚生運動ノ目標ハ国民ノ日常生活ヲ刷新シ特ニ余暇ノ善用ニ意ヲ注ギ健全ナル慰楽ヲ勸奨シ心身ノ錬磨ニ資シ情操ヲ醇化シ以テ国民親和ノ実ヲ挙グルニアリ、之レ畢竟国民ノ資質ノ向上ヲ図リ国本ヲ涵養スル所以ニ外ナラズ

惟フニ我国ハ現下未曾有ノ非常時ニ際会シ挙国聖戦ノ遂行ニ邁進シツツアリ事変ノ長期態勢化ニ伴ヒ今ヤ人的資源ノ確保ハ国家緊切ノ問題トナレリ。此ノ秋ニ当リ適性ナル国民厚生ノ途ヲ講ジ人的資源ノ培養育成ヲ図ルハ国家百年ノ大計ニ副フ所以ノモノナルノミナラズ亦正に銃後国民ノ重大ナル責務ナリ仍テ之ガ根本的実行方法ヲ討議検討シテ国策ニ寄与スルト共ニ之ヲ国民ニ周知セシメンガ為メ本大会ヲ開催スルモノナリ⁶⁾

この記述から日本厚生協会はこの時代に行われていた広東等の各地での戦いにおいて人的資源の確保を重大な責務であるとしていたと考えられる。また、当時問題視されていた壮丁体位を「余暇の善用」に意を注ぎ心身を錬磨することで改善しようとしていた。そして厚生大会を通して実行方法を討議検討することで国策に寄与することを目的として第一回日本厚生大会は開催された。

(2) 実施種目

第一回日本厚生大会では運動として厚生の日というプログラムの中でマツワーク、縄跳び体操、産業体操、保健体操、厚生体操が行われた。

またこの大会は大日本体育協会主催の精神作興大会と同時期に開催されている。そして都筑ら(2010)によると精神作興大会は大日本体育協会理事長の末広巖太郎が明治神宮国民体育大会の「予行演習」として位置付けたものであり、東京と関西地方で実施されたが、東京での大会が日本厚生大会のプログラムに組み込まれたとしてい

表1 第一回日本厚生大会実施種目

マットワーク、縄跳び体操、産業体操、保健体操、厚生体操、市民厚生軟式野球大会、市民厚生相撲大会

高岡裕之編 資料集：総力戦と文化第2巻 厚生運動・健民運動・読書運動より作成

る。⁷⁾しかし本研究では、大会の規模で考えた場合に体協主催の精神作興大会の規模が日本厚生大会よりも大きいこと、その後の厚生大会の報告書に精神作興大会の記述がないことから日本厚生大会の中に精神作興大会を組み込んだのではなく、精神作興大会の期間中に日程を調整しながら同会場で日本厚生大会を開催したと考える。これにより会場などの設備や審判などの運営役員を共有することが図られていたと考えることができる。この大会以降は戦況の激化により体育の公式戦の開催が自粛されていくこととおそらく関連して本大会以降に抱き合わせでの開催は行われていない。

実施種目としては各種体操が中心で野球や相撲と当時の参加者が多く見込まれる種目を開催した程度に留まったといえる。また磯村(1939)が述べているようにこれらの大会は優劣を競うのではなく、組織の振興を深めることを目的として開催された。⁸⁾

(3) 第二回日本厚生大会の趣旨

第二回日本厚生大会は1939年(昭和14年)11月10日から13日まで4日間の日程で愛知県名古屋市中にて開催された。

この大会では体育を奨励し、第一回大会のように競技性の高い種目が多く開催されているが、この年から政府が公式試合の開催を自粛する通牒を出していたことから抱き合わせはなく、独立した形での開催となっている。この大会は次のような趣旨で開催された。

我国厚生運動ノ指標ハ国民ノ日常生活ノ刷新ヲ図リ体育ヲ奨励シテ心身ヲ鍛錬シ不道德非衛生的ナル娯楽ヲ排撃シテ健全ナル慰楽ヲ勧奨シ教養ヲ昂メ情操ヲ陶冶シ明朗豁達ノ気風ヲ涵養シ以テ各自ノ職分ニ精励セシムルニアリ

之レ畢竟我国ノ人的資源ヲ拡充強化シ国本ヲ不拔ニ培フ所以ナリ

表2 第二回日本厚生大会実施種目

市民厚生大会 ※ ()内は参加人数
ラジオ体操(100名)、「日本産業の歌」体操(400名)、棒術(60名)、家庭体操、ラジオ体操及建国体操(500名)、民謡体操、愛国行進曲、皇国の母(500名)、音楽行進、大日本女子青年体操(150名)、大日本青年体操(1000名)
市民厚生競技会 排球 籠球 自転車 ラグビー 軟式野球
厚生夕合同合唱 踊り 音楽行進 詩吟並剣舞、音楽(吹奏楽、鼓笛隊)、詩吟並剣舞踊並武技(竹槍、薙刀、鎌術、柔道、剣道、棒術、両刀)
各區厚生大会
港區民運動會、昭和區御劍聯區民運動會、千種區内山町民運動會
武道大会 弓道、射撃及び銃剣術、角力

表2名古屋市編、1940、第二回日本厚生大会会誌名古屋市中より作成

今ヤ我国ハ未曾有ノ聖戦ニ遭遇シ日夜之ガ目的達成ニ邁進シツツアリ然レ共今次ノ聖戦ハ前途尚遼遠ニシテ之ニ対応スベキ戦時体制確立ノ為ニハ国民厚生ノ方途ヲ図ルコト愈之緊要トナレリ

此ノ秋ニ当リ国民ノ厚生問題ヲ討議シ其ノ指導方針ヲ講ズルハ真ニ銃後国民ニ課セラレタル重大責務ナリ仍テ茲ニ第二回日本厚生大会ヲ開催シ之ガ根本的諸問題ノ討議研究ヲ行ヒ以テ国ニ奇興セントス⁹⁾

この大会の趣旨によると体育を奨励し、非衛生的な娯楽ではなく健全な慰楽を勧奨するとある。ここには当時が戦時下であり、物資の不足から贅沢や楽しむことが悪い事であるとする風潮があった。そのため楽しむ事を前面に出している「娯楽」ではなく、それに代わるものとして慰楽という言葉を選んだと考えられる。また「人的資源の拡充強化」という言葉を使用していることから戦争に厚生運動がこれらの面で寄与する事を期待する旨は第一回日本厚生大会と相違ないといえる。

(4) 実施種目

第二回日本厚生大会ではラグビーや籠球のようにチームを組み集団で相手に立ち向かう競技が行われた。この時代の厚生運動は戦争において集団で行動し戦うことを常に意識していたことからそれに沿った集団で行う競技性の高い種目が行われ

たとえられる。

また各区の運動会を厚生大会の中で実施したこと、武道大会の中で弓道、銃剣術など戦地で実際に使われる技術を種目として実施したことはこの大会の特徴であると言える。

(5) 興亜厚生大会の趣旨

興亜厚生大会は皇紀 2600 年を記念し、1940 年（昭和 15 年）10 月 16 日から 10 月 20 日まで 5 日間の日程で開催された。この年に開催予定であった東京オリンピックと一括して大阪で開く予定であった第 4 回世界厚生会議が中止となった。¹⁰⁾ 本大会は第 4 回世界厚生会議が中止になり、その代替案として開催された。また、この大会においては同盟国であるドイツ、イタリアが外賓として招かれている。これには当時の厚生運動がドイツ、イタリアの厚生運動を参考にして行われていたことやこの大会の開催前に締結された日独伊三国軍事同盟が関係していると言える。

この大会は開催趣旨にもあるように当時の近衛内閣が提示した方針である東亜新秩序建設を印象付けるためにアジアという枠組みでの開催となった。前回までのように国内大会としての開催ではなく国際大会に格上げしたのである。しかし、参加国はアジア地域の国と同盟国に限られているため、本当の国際大会とは言い難い形での開催となっている。

これらの動きの中で名称も第三回日本厚生大会ではなく興亜厚生大会となり、次のような趣旨の下で開催された。

聖戦四年今ヤ東亜新秩序建設ノ大業ハ着々其ノ実ヲ挙ゲツツアルト我等一億同胞ノ責務愈々重大ヲ加ヘ総力戦体制ノ徹底更ニ緊要ナルモノアリ

此ノ秋ニ当リ我国ノ現状ヲ観ルニ国家興隆ノ根幹タル人的資源ハ遺憾乍ラ甚ダ憂フベキ傾向ニ在リ特ニ銃後産業ノ推進力タル労働力ノ低下ハ之ヲ其ノ儘ニ放置センカ或ハ興亜ノ大業完遂ニ由々シキ影響ヲ及ボス惧レナシトセザル状態ニシテ之ガ対策ノ確立ハ国家緊切ノ要務ナルハ言ヲ俟タズ

而シテ之ガ人的資源ノ培養強化ニ当タリテハ為スベキ方策多々アリト雖モ就中国民生活ノ刷新ヲ図リ心身ヲ鍛錬シ適当ナル休養健全ナル慰楽ヲ勸奨シ情操ヲ陶冶シ以テ旺盛ナル精神ト強健ナル身

体ヲ育成スル厚生運動ノ実践コソ時局下国民活動力拡充ノ為最モ適切有効ノ方策ナリト信ズ

茲ニ鑑ミル所アリ一昨年春政府当局始メ各方面ノ協力ニ依リ日本厚生協会設立セラレ次イデ大阪市ニ於テモ大阪市厚生協会ノ結成ヲ見タルガ爾來各方面ニ亘リ国民厚生運動ノ普及実践ニ力ツツメアル時恰モ紀元二千六百年ノ聖歳ヲ迎ヘ此ノ意義深キ年ヲ記念シテ仲秋ヲトシ大阪市ニ於テ興亜厚生大会ヲ開催シ日本全国ハ勿論滿州国、中華民國ヲ始メ遠ク隣邦友邦諸國ノ同志ヲ糾合シテ或ハ本運動ノ討議ニ或ハ其ノ実践ニ一段ノ研究並ニ發展ヲ図リ益々銃後奉公ノ誠ヲ致スト共ニ併セテ我国厚生運動ノ真髓ヲ弘ク世界ニ顕揚スルハ洵ニ時宜ヲ得タル快挙ト謂フベシ

茲ニ興亜厚生大会開催ノ趣旨ヲ明カニシテ各位ノ深甚ナル理解ト絶大ナル協力ヲ乞フ次第ナリ¹¹⁾

過去 2 回の大会と同様に、この大会でも人的資源についての記述がありこの大会の開催時期においても人的資源の確保及び充実は大きな課題であったと考えられる。

また大会の範囲を日本国内だけでなく、東アジアに拡大したこともありその周辺国との協力のもと厚生運動の研究並びに発展を願う旨がこの大会の開催趣旨として述べられている。

表 3 興亜厚生大会実施種目

| |
|---|
| <p>甲子園厚生運動大会 () 内は参加者数 行進遊戯二千六百年 (2,000 名)、ラヂオ體操 (2,800 名)、日本産業體操 (日本晴) (2,600 名)、大日本國民體操 (くろがねの力) (1,500 名)、大阪市青年體操 (600 名)、演奏行進 (500 名) スタンド體操 (全員)、紀元二千六百年奉祝體操 (600 名)、大日本國民體操 (作業體操) (2,600 名)、合唱 (愛國行進曲 其の他) (全員)、産業日本の歌 (歓喜の黎明) (2,000 名)、集団體操 (2,000 名)、自轉車訓練 (150 名) 総合訓練大会 大阪女子青年體操、郷上演技交歓、厚生行進、音楽と體操、紀元二千六百年奉祝歌、戦時市民の歌、舞踊及び繩跳、蜜柑船及日月遊、大日本國民體操指導、日本よい國及防火競技、婦人愛國の歌及棒遊び、營火 (合唱、斧の響輪唱、薙刀、隣組の歌及踊)、團體走 (四百米)、六十米疾走</p> |
|---|

興亜厚生大会事務局編 (1941) 紀元二千六百年興亜厚生大会誌より作成

(6) 実施種目

興亜厚生大会の実施種目は過去の厚生大会とは違い、競技性の高いプログラムがなくなり、本大会においては演劇、舞踊、音楽などが取り上げられていることが、ほとんど体育行事となっていた過去の2大会との違いである。この背景には体育に特化していたことに対する不満が関係者からあがっていたことがある。また会場を甲子園球場と市立運動場の2か所に分けて甲子園厚生運動大会と総合訓練大会として開催された。開催規模から見るに甲子園厚生運動大会は一般向けに、総合訓練大会は関係者向けに開催したと考えられる。

(7) 東亜厚生大会の趣旨

東亜厚生大会は興亜厚生大会から1年の期間をあけて1942年(昭和17年)の8月18日から20日の3日間の日程で開催された。東亜厚生大会の開催経緯については、1940年(昭和15年)の興亜厚生大会において政府と協和会により当時の厚生運動についての協議が行われた。そして満州国十周年を祝う諸行事の計画が企画され、民生部より東亜共栄圏を巻き込む形の厚生大会の要望が出された。

そして東亜厚生大会は民生部、奉天市、協和会の主催により会場を満州国の奉天市として次のような趣旨で開催された。

今や親邦日本ハ新東亜建設ノ聖戦ニ赫々タル成果ヲ収メ愈々其ノ目的完遂ニ邁進シツツアリ。日本ト一徳一心ノ我が満洲國ハ固ヨリ大東亜共栄圏内諸國ノ各民族ハ擧ツテ全力ヲ竭シ之ニ協力スベキ秋ナリ。

惟フニ我が國ハ建国以來道義ヲ基トシテ民族協和シ親邦日本ノ協力援助ノ下ニ大陸ニ於ケル新秩序建設ノ據點トシテ營々建国ニ努メ正ニ驚異的國運ノ進展ヲ齎セリ。然レドモ仍我が國力ヲ愈々強固ニシ聖業ノ一翼ヲ擔ハング爲ニハ更ニ大イニ國民ノ士氣ヲ昂揚シ國民活動力ノ振作強化ヲ図ラザルベカラズ。茲ニ鑑ミ我が國ニ於テハ特ニ昨年來政府協和會ヲ始メ各方面協力ノ下ニ國民厚生運動ノ展開ヲ企画シ時局下日常生活ヲ刷新シ家庭並ニ職場ニ於テ徹底セル一家親和ノ氣風ヲ作興シテ厚生生活ヲ伸暢シ旺盛ニシテ明朗闊達ナル精神ト強健ナル身體ノ育成ヲ図リ以テ國民各自其ノ職域ニ

於テ歡喜奉公セシムルノ方策ヲ考究シ來レリ。

自給モ滿洲建国十周年ヲ迎フルニ方リ此ノ意義アル年ヲ紀念シテ建國ニ由縁深キ奉天市ニ於テ東亜厚生大會ヲ開キ滿洲全國ハ固ヨリ親邦日本ヲ始メ中華民國等新東亜の同志ヲ糾合シテ厚生運動ノ實踐方策ニ付討議研究ヲ遂ゲ我が國厚生運動ノ發展促進ヲ図ルト共ニ東亞諸國ノ厚生運動ヲ愈々盛ニシテ各國民ノ勤勞力ヲ増強シ相携ヘテ聖戰ノ目的貫徹ニ邁進センコトヲ期セントス。

茲ニ建国十周年慶祝東亜厚生大會開催ノ趣旨ヲ明カニシ關係各方面ノ深キ理解ト絶大ナル協力ノ下ニ本大會所期ノ目的ヲ達成センコトヲ念願シテ敬マザル次第ナリ。¹²⁾

この記述から東亜共栄圏の更なる発展に協力するために厚生運動を討議検討することで国民の勤勞力を増強することを目的として東亜厚生大会は開催されたことがわかる。

この大会は東亜厚生大会として国際的な名前が付けられているが、第二次世界大戦に入り戦況が激化したこともあり、ドイツ、イタリアの関係者は駐滿洲國獨逸國公使のウーグネル駐滿洲國伊太利國公使のネローネが祝辞を述べたのみで実際の参加国はアジア諸国に限られた。よって前回大会と同じく国際大会とは言い難い形での開催となっている。

(8) 実施種目

東亜厚生大会では実施種目については戦争も終盤に差し掛かっていることもあり、厚生運動大会というプログラムの中で自転車訓練、鐵道作業訓

表4 東亜厚生大会実施種目

| |
|--|
| 厚生の夕 講演と映画、音楽と舞踊(日・満)、演劇(満)、 演劇(日) 厚生運動大会(数字は参加人数) 建国杖1000名、體育舞踊「滿州厚生運動歌」500名、 在滿國民學校體操1000名、體育舞踊「建國十周年 慶祝歌」1000名、滿洲建國體操1000名、滿鐵「社 員會體操」800名、自轉車訓練100名、大日本女 子青年體操300名、滿洲「産業體操」1000名、舞 踊「奉天市歌」1000名、奉仕團訓練500名、大日 本青年體操、1000名、鐵道作業訓練200名 |
|--|

東亜厚生事務局編(1942) 東亜厚生大会記録誌より作成

練などの軍事的色彩の強い種目の他にも、奉仕團訓練という半裸でシャベルを持ちながら演ずるような産業を意識した種目などが実施された。各種目100～1,000名が参加する大人数での演技となった。しかし、自轉車訓練や鐵道作業訓練はそれぞれ100名と200名で参加人数が他の種目に比べて少ない。これには戦時下での物資の不足により十分な道具をそろえることが難しかったことが考えられる。

また本大会において体操、舞踊、演劇が種目の大半を占めていることから集団で同じように動くことを重要視していたことがわかる。これは主催側の思惑として戦地での行動様式を意識していたことが考えられる。またどの種目も多少の差はあるが100人単位できっちりと参加していることから参加者については動員がかけられていたと考えられる。

5. 日本厚生協会の活動のねらい

厚生省の外郭団体として設立された日本厚生協会はその立場上、活動内容を厚生省の思惑に大きく左右されることとなった。

日本厚生協会の活動の中で最も中心的な取り組みである日本厚生大会の実施種目から見ても、第一回では大会の結果を重視せず、組織の親睦を図るという趣旨のもと市民厚生相撲大会など当時の人気種目に限定して開催した。また、精神作興大会との抱き合わせ開催という形をとり、設備面や審判などの運営面の簡素化や体力向上の面を強調させることを図ったことが特徴として挙げられる。

第二回大会は第一回に比べ種目数を増やし、前回よりも競技性の高い種目が行われた。またこの大会の特徴的な取り組みとして各区の運動会を開催したことも特徴として挙げることができる。

第一回、第二回大会のみの開催事項があることから、創設期ということもあり厚生運動に関する取り組みに試行錯誤があったことが考えられる。

第三回大会である興亜厚生大会では大会の規模を国内大会ではなく、国際大会として格上げをして開催し、当時の同盟国であったドイツ・イタリアを外賓として招いた。しかし、実際の参加者を見るとアジア諸国と同盟国に限られていることか

ら本当の意味での国際大会とは言い難い形での開催となっている。実施種目に関しては体操を中心にそれまでの大会で問題点として拳がっていた体育への特化という問題を解消するため舞踊や合唱なども取り入れられている。

第四回大会である東亜厚生大会は第二次世界大戦に入り、戦況も悪化したため、ドイツやイタリアなどの同盟国を招くことはできなかったが、外的に国力を発信するために東アジアの国を集める形で前回と同様に限定的な形で開催された。実施種目については第二次世界大戦に入っていたことから伺われるように戦況の激化を意識した奉仕團訓練や鐵道作業訓練など軍事的色彩の強い種目が行われた。

以上のことから日本厚生協会の活動の狙いは、設立趣意書中の「心身ヲ錬磨シ」の記述にあるように厚生運動を通して国民の体力を向上させ、その結果、戦争において重要な人的資源の供給に寄与することを目的として行われていた。このことは各大会に一貫して団体で行う競技を中心としていることから分かる。しかし、戦況の悪化など社会情勢が目まぐるしく変わる中で厚生運動も影響を受けた。それゆえ開催形式や名称が定まらず、実施種目も大会ごとに変わるといった形で実施されていたことから、実際に厚生運動がその活動を通して心身を錬磨することに寄与できていたとは考えにくい。

6. まとめ

厚生省設立は結核患者数の増加傾向により、壮丁体位の低下が問題視されたことが直接の要因である。そしてその動きの中で国民の健康や衛生を担当する新省の設立が提案された。これに軍部(特に陸軍)の動きが大きく関係していたことで軍部と厚生運動は深い関係性をもつこととなった。

厚生省設立の3ヶ月後に設立した日本厚生協会は、国民の体位・徳性の向上という目的のために余暇の利用を進んで指導すること、その中で健全なる余暇の善用に指導をもって国民の福祉の増進することを活動内容として設立された。

その代表的な活動として日本厚生協会は日本厚生大会を開催し、厚生運動の主たる目的である国民体位(国民の体力)を向上させるための啓蒙活

動に従事した。各厚生大会においては関係者を集め、盛大に開催はしているが、関係者に限った活動に留まっていることから啓蒙や体位向上という本来の目的に寄与していたとは言い難い。

また、日本厚生協会の会員が個人会員でなく団体会員という形での登録及び参加であったことから日本厚生協会が末端のところまで啓蒙ができていたかといったことを実際に把握していたとは考えにくい。

これらのことから厚生運動が本当の意味で一般大衆への啓蒙につながったかどうかは一定の疑問を投げかけざるを得ない。

よってこの時代の厚生運動のねらいは、当時政治的に影響力を持っていた軍部（特に陸軍）を中心に戦争という非常時の中で最も重要である人的資源の確保及び質の向上を大義名分とし、それに貢献し外国への国力の発信に寄与しうる有効な手段”として厚生運動を利用することであったと考えることができる。しかし、活動自体が形式的なものに終始してしまったため、本当の意味での目標達成には至らなかったと考えられる。

引用文献

- (1) 厚生省五十年史編集委員会：厚生省 50 年史（記述編）、大日本印刷株式会社、1988
- (2) 中村祐司：戦時下の『国民体育』行政－厚生省体力局による体育行政施作を中心に－、

早稲田大学人間科学研究 5 (1)：123-124、1992

- (3) 高岡裕之編：資料集 総力戦と文化 第 2 卷、大月書店：11、2001
- (4) 日本レクリエーション協会：日本レクリエーション協会二十年史、遊戯社：17、1966
- (5) 日本レクリエーション協会：日本レクリエーション協会三十年史、遊戯社：24
- (6) 高岡裕之：資料集 総力戦と文化 第 2 卷、大月書店：3、2001
- (7) 都筑真他：戦時下における日本の厚生運動－厚生大会（1938－1940）を中心として－、筑波大学体育科学系紀要：32、2010
- (8) 磯村英一：厚生運動概説、常磐書房：59、1939
- (9) 名古屋市：第二回日本厚生大会会誌、名古屋市：1、1940
- (10) 藤野豊：厚生省の誕生、かもがわ出版：96、2003
- (11) 興亜厚生大会事務局：紀元二千六百年興亜厚生大会誌、興亜厚生大会事務局：8-9、1941
- (12) 東亜厚生事務局：東亜厚生大会記録誌：P11、1942

（受付：2012 年 12 月 6 日）
（受理：2013 年 1 月 30 日）